

平成30年11月30日
(2018年)

保護者の皆様

吹田市立西山田中学校
校長 瀬尾 紳二

平成30年度 全国学力・学習状況調査の分析について

本年度、3年生を対象として「平成30年度全国学力・学習状況調査」を実施し、9月上旬に個人ごとの結果をお返ししました。また吹田市でも、今回実施した調査結果の概要を吹田市のホームページを通じて公表しております。

この調査は中学校の最終学年のみを対象とした調査であり、教科も国語・数学・理科に限られ、測定されたものは学力の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。そのことをまず踏まえつつ、調査によって得られた課題を明らかにし、その改善に全力を注ぐことが、調査本来のねらいであると考えております。

対象となった3年生には、よりきめ細やかな指導ができるよう取り組みを進めるとともに、学校全体として課題に応じた学力向上につながる具体的な指導法の工夫改善も図ってまいります。各ご家庭におかれましても、以下の分析結果をもとに、今後の家庭学習の指針として、参考にしていただきますようお願いいたします。

1 教科に関する調査結果の分析

【国語 調査結果の概要】

〔国語A：主として知識〕

平均正答率は大阪府平均値・全国平均値ともほぼ同じという結果であった。

学習指導要領の領域ごとにみると、「話すこと・聞くこと」は、全国平均値をやや上回っているが、「書くこと」「読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は全国平均値とほぼ同じである。「目的に応じて文の成分の順序や照応、構成を考慮して適切な文を書く」は全国平均値を大きく上回り、「書いた文章を読み返し、伝えたい内容が十分表されているかを検討する」「歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して読む」は、全国平均値を上回っていた。「語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使う」「文章の展開に即して情報を整理し、内容を伝える」「話し合いの話題や方向を捉えて的確に話す」については、全国平均値をやや上回っていた。一方、「行書の基礎的な書き方を理解して書く」は全国平均値を下回り、「古典に表れたものの見方や考え方を理解する」は全国平均値をやや下回った。書写・古典の学習で一部課題がみられる。

〔国語B：主として活用〕

平均正答率は大阪府平均値をやや上回り、全国平均値とほぼ同じという結果であった。

学習指導要領の領域ごとにみると、「書くこと」「読むこと」は全国平均値をやや上回っていたが、「話すこと・聞くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は全国平均値とほぼ同じであった。「文章とグラフとの関係を考えながら内容を伝える」「目的に応じて文章を読み、内容を整理して書く」については、全国平均値を大きく上回った。

【国語科における成果と今後の改善点について】

今回の調査結果から「読む力」「書く力」「話す、聞く力」は概ね身につけていると考えられる。しかし、漢字の書き取りの力が比較的弱く、また語句の使い方を工夫して、論理的に文章を表現する力は弱いことがわかった。今後の課題としては、まず漢字の書き取り能力向上のため、中学校配当漢字を確実に身につけるよう、宿題のチェックや書き取りの小テストを継続的に行い、復習も繰り返ささせていく。また、語彙力向上のため、平素から活字に慣れ親しみ、語句の意味がわからなければこまめに辞書を使って意味を調べる習慣をさらに身につけさせ、朝の読書活動もより一層大切に取り組みさせる。

一方、「話す力」の中で、「質問の意図を捉える」とか、「全体と部分との関係に注意して、相手の反応を踏まえながら話す」という力が他と比べやや下回っている。今後、授業の中で、班による話し合い活動・グループ活動をさらに取り入れ、コミュニケーション能力の向上を図っていく。

【数学 調査結果の概要】

〔数学A：主として知識〕

平均正答率は大阪府平均値・全国平均値をやや上回る。

学習指導要領の領域ごとにもみると、「図形」「資料の活用」の領域では全国平均値と同程度であり、「数と式」「関数」の領域において全国平均値をやや上回っていた。「具体的な場面で関係を表す式を、等式の性質を用いて、目的に応じて変形することができる」「四角錐の体積は、それと底面が合同で高さが等しい四角柱の体積の $1/3$ であることを理解している」「反比例について、グラフと表を関連付けて理解している」「一次関数 $y=ax+b$ について、 x の値の増加に伴う y の増加量を求めることができる」「一次関数 $y=ax+b$ について、 a と b の値とグラフの特徴を関連付けて理解している」「一次関数 $y=ax+b$ について、 x の値の増加に伴う y の増加量を求めることができる」については全国平均値を上回っている。「長方形やひし形が平行四辺形の特別な形であることを理解している」「半円をその直径を軸として回転させると、球が構成されることを理解している」については、やや課題が見られる。

〔数学B：主として活用〕

平均正答率は大阪府平均値・全国平均値をやや上回る。学習指導要領の領域ごとにもみると、「数と式」「関数」「図形」「資料の活用」のすべての領域で全国平均値をやや上回っていた。しかし、記述式の問題に対する無回答率はやや課題が見られた。

「事象を理想化・単純化することで表された直線のグラフを事象に即して解釈することができる」「発展的に考え、条件を変えた場合について、証明の一部を書き直すことができる」については全国平均値を上回り、「事柄が成り立つ理由を、構想を立てて説明することができる」については全国平均値を大きく上回っている。

【数学科における成果と今後の改善点について】

授業の最初に行う復習プリントや、習熟度別少人数授業の特性を生かした「数と式」で行う計算問題の時間を多く設けるなど日々の活動を大切にしてきた。そのため、積み重ねてきた基礎的な学習内容が定着してきているものと思われる。各分野については、日々の宿題を常に確認し、問題集の取り組み方の指導や教科書の章末問題などのノートチェックを行い、

単元の定着に力を入れてきた。また、「数学的な見方や考え方」をさらに向上させるため、グループ活動などの工夫を取り入れ、生徒が主体的に授業に参加できるよう取り組む。本校の取り組みとして、「めあて」の提示と、「まとめ」による振り返りを確実に実施し、一日の授業で学んだことを整理することで、得意な分野と苦手な分野を理解し、自らの理解度を把握できる授業を行い、学習意欲を高める授業づくりに取り組んでいる。今後も継続して、数学に苦手意識を持つ生徒や、より発展した課題に取り組みたい生徒のため、テスト週間の朝や放課後に補習を行い、質問しやすい環境を作っていく。

【理科 調査結果の概要】

平均正答率は大阪府平均値・全国平均値とほぼ同じである。

学習指導要領の分野ごとにみると、「物理的領域」「化学的領域」「地学的領域」の分野では全国平均値と同程度であり、「生物的領域」の分野において全国平均値をやや上回っていた。評価の観点および問題形式ごとにみると、「自然事象への知識・理解」「短答式」においては全国平均値をやや上回っている。しかしながら、「自然事象への関心・意欲・態度」「科学的な思考・表現」「観察・実験の技能」「記述式」についてはやや課題が見られる。

【理科における成果と今後の改善点について】

調査結果より、生徒が今までに習得した知識を、日常生活や社会を関連づけ、科学的に探究することに課題があることが明らかになった。本校の取り組みとして、「めあて（課題）」の提示と「まとめ（考察）」による振り返りを実施している。その際、教師がめあて（課題）を提示するだけでなく、自然の事物・現象や身の回りの事象から問題を見だし、生徒自らが課題を設定して科学的に探究する学習活動を充実させていく。また、実験結果の話合いの場面や発表場面では、「予想や仮説と観察・実験の結果が一致しているかどうか」という視点や、「課題に正対した考察になっているか」という視点を大切にして、指導に当たっていく。

2 生徒質問紙に関する調査結果の分析

本校の平均回答率と全国の平均回答率を比べて差異が目立つものとして

【調査結果】

〔自分自身のことについて〕

- ・将来の夢や目標を持っている生徒が全国平均に比べて少ない。
- ・人の役に立つ人間になりたいと思っている生徒が多い。

〔家庭生活・家庭学習について〕

- ・毎日同じくらいの時刻に起きている生徒が少ない。
- ・家で自ら計画を立てて勉強をしている生徒がやや少ない。
- ・家で学校の宿題をしている生徒が少ない。
- ・家で学校の授業の予習・復習をしている生徒が少ない。
- ・家で予習・復習やテスト勉強などの自学自習において、教科書を使いながら学習している生徒がとても少ない。
- ・学校の授業時間以外に読書をしている生徒がやや少ない。
- ・家の人と学校での出来事について話をしている生徒が多い。

- ・新聞を読んでいる生徒が少ない。
- ・学校の授業以外に1日あたり2時間以上勉強している生徒が多い。

〔地域生活について〕

- ・地域の行事に参加している生徒が少ない。
- ・地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある生徒が少ない。
- ・地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある生徒が少ない。
- ・地域社会などでボランティア活動に参加したことのある生徒がとても少ない。

〔学校生活・学習について〕

- ・学校の授業で、話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思っている生徒が少ない。

【改善・向上のために】

〔学校では〕

- ・個々の子ども理解に努め、良いところを認めるとともに、その良さが発揮できるような役割や場を意図的に作ることで自己有用感・自尊感情を育む。
- ・生徒会活動や委員会活動など生徒が主体となって学校生活について考える機会を増やし、規範意識を高める活動を検討していく。
- ・「朝食を毎日食べる」「早寝早起き」など基本的な生活習慣が定着するように小学校と中学校が連携して取り組みを進める。朝食に関しては、「弁当の日」の取り組みを通して食の大切さを学ぶ機会を活用する。
- ・子ども自身が進んで家庭学習に取り組めるよう指導し、教材も創意工夫する。
- ・読書習慣の定着のために、小学校と中学校が連携して、「朝の読書」時間の工夫や生徒会・図書委員会の取り組みを進める。
- ・子どもたちが自分の考えを表現できる場を設定するだけでなく、目標が明確化された授業の中で、子どもたちが自分自身の学びや、友だちと協働して学ぶことの良さを実感できるよう授業改善に取り組む。
- ・「めあて」の提示、自分で考える時間や話し合う活動の確保、「振り返り」の実施等、授業の流れについて学校組織として統一したスタイルを推進する。
- ・地域と連携し、地域社会に興味関心を持てるよう働きかける。

〔家庭では〕

- ・子ども自身が主体的に活躍できるような家庭での役割を与えたり、場を設けたりして積極的にそれを認め、褒めることで自己有用感・自尊感情を育む。
- ・「朝食を毎日食べる」「早寝早起き」など基本的な生活習慣の定着を目指す。
- ・家庭学習については、家庭生活の時間の使い方を話し合う中で、最終的には子ども自身が取り組み方法について主体的に決めるとともに、それを実行できるようにする。
- ・社会の動きに関心を持てるよう、テレビのニュースを家族で見たり、時事問題を話題に家族で話し合ったりする。